



さっぽろ

郵便振替 02710-3-570 あごら札幌

No. 218

あごら札幌 連絡先
細田 (011)
644-2927

今月通信担当
細田英理子

《今月の内容》

どうする? どうなる
「あごら札幌」... 1・2

あごりと和み
... 4・5・6・7

あごらに対する声... 2・3 情報 ... 8

1998.8.15 発行

通信購読料 1,200円 (年間)

どうする? どうなる? 「あごら札幌」!

谷百合子

「あごら札幌」も、発足して24年になる。発足当時、20代だった人は40代に、30代は50代となり、ウーマンリブ高揚期の波をくぐった人もくぐらなかった人も、各自、年相応の問題意識への変化が見られる。

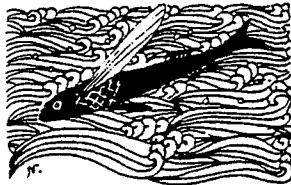
例えば、男社会へのいきどおりや子どもの教育問題などが主だった話題も、自己の職場での多様な問題や、老後の生活、健康などが中心の話題になっていたりして、20年の歳月は、リブの上にも流れてきたのである。

「あごら札幌」も時代と共に、後半の10年は、こじんまりと、地味に、どちらかと言うと、仲良しグループ的かつフェミニズム同好会の域を出ない活動状況が続いて来た傾向がある。

通信発行部数も、特にこれといった宣伝もせず、100部前後を保ち、あっさり、すっきり。

しかし、このところ、「これでいいのだろうか?!」という静かな問題提議が、メンバーの一人から上がった。その1...私たちも年をとってきて、編集会議も夜遅くなると作業がつらい人もいる。その2...書く人が固定化ってきて紙面に新鮮味が欠ける。その3...「あごら札幌」は社会に必要とされているのだろうか? 読者の反応が今一つ見えて来ない。

さっそく、編集メンバー7人が集まり、話し合った。





読者からのアンケート回収は3通。どれも身に余る有り難いもので、愛されている「あごら札幌」に一同感激した。しかし、3通とは……。もうウーマンリブやフェミニズムはマニアックなテーマとなり、時代に置き去られ、風化したテーマなのか……。

＊

結論！　世間はともかく「私」はどうなのか？！

「私」にとって「あごら札幌」が必要ならば、“即中止”という手段はとりあえず止めよう。「私」にとって、どんな「あごら札幌」にしたいのか、無理をせず考えてみようということになった。

これからは個人宅だけの集まりではなく、女性センターなどで、読書会や、「女と年金」などのテーマで勉強会など、アウトドア志向でという、ちょっと積極的な意見も出た。

しかし、「女の広場」としての「あごら札幌」は、沢山の人の声をのせて行きたい。

原稿をお待ちしています。



あごらに対する声

—アンケートから—

先月、あごらに対してどう思っているかというアンケートをとりました。3人の方から声が寄せられましたので紹介します。



<印象に残っている記事>

いつもながらしか得るものがあるので、これ、と特定できません。

<日頃関心を持っていること>

一番はフェミニズムのジェンダー問題、特に社会構造的観点から（どちらかというと心理学的な面より）

二番は地域に根づいた人々の平和な暮らしを維持す

るためには何をすべきかということ、それとか「教育」のこととか

<あごらに対して思っていること>

今の私の生き方は「あごら」なしにはできなかった。経済的、精神的自立、女性解放をこえた人間解放のこと、平和の問題とフェミニズムの関連などの見方、考え方、フェミニズムを論理的にとらえることや現在の自分が自己確立できたと思えるのは「あごら」からおそわった。もちろん夫婦のありかたも。

「あごら」からはなれて購読のみになって久しいので、甘い汁だけ吸つてはいるようで気がひけますが、他の方面でフェミニズムと深くかかわって頑張っていますので今後ともよろしくお願ひします。

かが ひろこ（購読歴20年以上？）



<あごらに対して思っていること>

「あごら」を読んで日本人女性をもっとわかるようになってきました。まだ日本語が充分できませんのでわからないところもいつもあります。

毎日激しい差別をうけながらいろいろ考えることになりました。日本人女性は「私とアイヌ」と「私と在日非日本人」についてずっと（差別がなくなるまで）たくさん記事を書いていただきたいです。

ナンスイー・地球



<印象に残っている記事>

各号それぞれ印象に残る記事がありますが-----。217号でも景平さんの記事。あと、アメリカの女性の兵役についての、また、安岡菊之進さんを知ることができた号も印象に残っています。

<日頃関心をもっていること>

買春、性差別を通して自分をみつめること。

<あごらに対して思っていること>

札幌あごらはぼくにとって、メンバーのみなさんと会って話をしたり、ぼくの原稿をのせていただいている大切な場です。これからもよろしくお願ひします。

中山治光（購読歴7～8年）



あごらと私

編集メンバーそれぞれにも、今、あごらに対して思っていることを書いてもらいました。今号と次号と2回に分けて載せていきます。皆さんのお待ちしています。

細田英理子

今の私の生き方があるのは「あごら」に拠る所が大きい。あごらに出会い、フェミニズムを知り、目からうろこがおちる思いだった。恋愛その他で悩んでいて、自分個人の問題だと思っていたことが、実は私が「女である」という事と深く関わりのあることだと気付いたこと。自分をしばっていたものの本質、構造が見えて、以後とても生きやすくなった。

あごらに関わって約20年、かつてほどのエネルギー（今思うと毎月例会をやり、通信を発行し、年一回講演会等を企画していたなんてスゴイ！）はないが、本音でいろいろな事を話せるこの「あごら」の場はこれからも大事にしていきたいと思っている。しかし、最近の編集会議はメンバーそれぞれが多忙のため、4人くらいしか集まらない事が多く、しかも夜10時をすぎると皆ダウンしてしまう（若い頃より睡眠不足がこたえる！）。ただでさえ仕事等で忙しいのに皆毎号原稿があるので、それで精一杯で、会議の最後まで保たないのだと思う。私は特別に原稿を免除してもらっているので、ダウンせずに比較的最後まで元氣でいるが、このままの状況では通信を出し続けて行くことは無理かナーと思うことがある。

また通信の内容もどうなのだろう？たくさんの人があごらから書いていてこそ面白いと思うのだが。書き手が固定しているような最近の状況を読者はどう感じているのだろう。アンケートでは3人しか反響がなかつたし-----。

でももしここで通信をやめてしまったら、「あごら札幌」の実態は事実上なくなってしまうかもしれない。私自身気持ちが揺れ動いている。この間の話し合いではとりあえず、久しぶりに例会（女性と年金）をやってみようということになった。これを機に活気づければよいのだが-----。



奥村さと子

○ 以前、テレビタックルに出ていた田嶋陽子さんを見ていて「もう止めればいいのに、出演してやることはないよ」と思ったことがある。彼女が本気で怒って、回りが茶化すパターンが鼻についてきたし、その時は彼女が痛々しく見えた。

視聴者は田嶋さんの怒りをどのようにうけとめているのだろうか? 「何をむきになってるの、みっともない、私はもっとスマートにやるわ」と白いている人も少なくないだろう。

その後NHKで、母校の小学校の一日教師として行った日の田嶋さんのドキュメンタリーを見る機会があった。アップで写った彼女は涙を流していた。中学時代の教師に「女の子の学力は年頃になると下がるものだ」と言わされたのがくやしかったと。

その日教壇に立った彼女はのびのびとして、そして威厳にみちていた。クラスの女の子の目が真剣に彼女をみつめていた。「女らしさ、男らしさに囚われることはないんだよ」というメッセージが多くの中学生たちに確かに受け止められていたと思う。



○ 女が本気になって怒ったり、むきになったりすると、少し変なこつけいな人にされてしまう。

威厳というものは権威と背中合わせだから、たいてい女は威厳なんかとは無縁の所に居る。わずかに母性とセットで認められることがあるらしいがー。

○ 私はドタバタ、アクセクしながら、女をもう50年からやってきた。仕事も中途半端、母性も中途半端、私の流儀で通してきたが、私がまっとうに生きようとすると摩擦が起きる。

むきになったり馬鹿をやったりしながら我流を通してましたが、私はひんしゅく者で少し変なおばさんになってしまっていた。威厳のかけらもありやしない。淋しいー。

○ ところで「あごらと私」です。

そんなわけで20年近く前から、私はあごら通信に自分のその時々の怒りを表現してきました。自分の本気が誰かに伝わるかも知れないと思って。

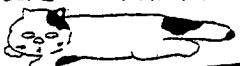
一個人的なことは社会的なこと一

生き難さを抱え、怒りにふくらんだ女が集まって、自分の問題を社会に向かって問いかけていく営みは、フェミニズムがなくすしに無価値なものにされてしまいそうなこの時代に、この時代だからなお必要とされているような気がする。

○ あごらは広場です。人の情と情報の広場。

活力の衰えをこぼし始めて久しい状態を開拓するために、ここは原点に戻って、後輩たちが集まりやすい情報の広場をもう一度設定してはどうでしょう。通信編集日の外に、年に6回位、奇数(偶数)月の第〇〇曜日と、日を決めて集まる場所を外に設けて例会を持つ。

現状維持ではなかなか難しいと思いますので、新しい広場を設定して次世代につなげていけたらと思います。



タカハシヨシエ

あごらと私。あごらとはあまりにも長いつき合いなので、もはや「あつてあたりまえ」になってしまっていることに気がつく。その割に、最近は、一線を退いたような会員になっていることを反省しているのだが。

ところで最近の、「あごら」でよかつた、をひとつ聞いて下さい。

今年、フィリピンに赴任して、1ヶ月近く過ぎた頃、新聞紙上で「松井やよりさんの講演会」を知り出かけました。参加者名簿の所属欄に何気なく「あごら札幌」と書き、席に着いたところ、見知らぬ女性から「高橋さんですか？」と声をかけられました。彼女は、名簿欄の「あごら」を見て受付の人に「高橋さんはどこにいるか」聞いたそうです。何と、20数年前東京の「あごら・BOC」で数回お会いした「ともちゃん」でした。なんたる奇遇！そして、その日から事態は一転しました。ほとんど全ての面で。

おりしも、フィリピンは、選挙戦真っ盛り。

NGOに関しては、この人！と言われているKさんが、本職の方で忙しくて会えず、情報入手が困難な時期でした。それが、「ともちゃん」の出現で知りたかった情報を全て得ることができました。それだけではありません。

仕事は、行ったその日から「暗礁に乗り上げ状態」であることがわかり出口が見つからないままに悶々と試行錯誤を繰り返すばかりでした。ところが、「ともちゃん」のお連れ合いの「けんちゃん」が、私と半同業者であり、仕事の面でも随分と励されました。「けんちゃん」と会ったのは1回きり（彼の一時帰国が数日後で、私の帰国する翌日に再び来比する予定）の数時間でしたが、今思い返してもとても貴重な時間でした。その後、仕事とNGO活動をリンクできそうな出会いもあり、結局の所、後ろ髪引かれる思いで時間切れとなり帰国してきたのですが。

「あごら」と一言書き添えたおかげで、時間を活かすことができたのでした。

わたしが、「あごら」と出会ったのは1975年、国際女性年の第1回目の世界大会がメキシコで開催される頃。あれから、23年。いろいろあって、何度か「辞めよう」と思ったことも確かにあった。

でも、辞めなかつたのはどうしてだろう。

「あごらの存在理由」・・・以前とは相当違ってきているとは思う。私にとって「あってあたりまえ」なのだから、「理由なんていらない」という乱暴な言い方もできる。私とリブとの最初の出会いであつた「女・エロス」も廃刊、「行動を起こす女たちの会」も終会・廃刊。

結論・・・やっぱり、「あって」ほしい！続けるためには、廃刊を危惧される要因をひとつずつぶしていく。誰の為でもなく、自分のために続けたい。そして、それが友だち（これから出会うかも知れない友だちも）の為にもなるようなことがあつたら、とってもうれしい。



あごらから ちらつたもの

旅中

「あごら札幌」（以下あごらと記す）……とは、そもそも私にとって、なんだったのだろう、と考えてみました。

——私があごらに参加したのは、谷さん言うところの「こじんまりと、地味に」なってからあごらだそう。それでも、私にとっては、あごらは、本の中だけで知っていたことを実際に目の当たりにする「どこでもドア」であり、自分の頭だけで考えていたことをさらに深めることができたり、安心してものが言える場であったり……そんな感じだったと思う。

——でも、やっぱり、書ける場であるってことが一番大きかったかな。

例えばね、「見られる」も「見せる」も同じことじゃないか、という意見に対して、じゃあ「（人に）笑われる」と「（人を）笑わせる」のも同じことなのか、「（誰かに）何かをしてあげることと「（誰かに）利用される」ことは同じことなのか、とか、ちまちまといろいろ考えてしまうのだけれど、相手によっては、“そんなことどうでもいいでしょ”とか、“考え過ぎ”だと、アブナイ人”とか言われちゃうのね。——まずはそんなことを言ってもかまわない場が欲しかったのかもしれない…。また、誰かに向けて書くことで、さらに考えが深まったり、新しいことに気付けたりもするしね。

ふと思ったのだけど、あごらの、普段顔を合わせられるメンバー以外の人から、感想を聞か

せてもらう機会ってあまりないけど、気がつくと、顔を合わせたことのない読者の方から、なんというか（私にとっては）絶妙の間で、感想や意見をいただいたりしている。

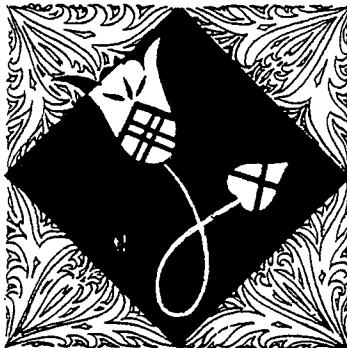
——初めてあごらに原稿を載せていただいたとき、こんなこと書いていいのかなあ、あんまりフェミニズムっぽくないネタだけど…なんて、ちょっとびくびくしてたんだけど、見ず知らずの（という言い方もなんですが）読者の方から感想をいただいて、ほっとしたということもあったんですよね。

それから…、ずっと抱いていたちょっととした疑問が、なにかの拍子に解けて、そうか、そうだったのかあ、とばかりに、あごらに書いたら、“そうだよね”とか“その考え方おもしろいね”というような感想をいただいて、こんな風に書いていいんだなって心強く思って、わりとそういう路線で何だかんだ書いてました。

…“ああ、失言してしまったなあ”って反省したこと也有ったんですけどね。

あと、迷っているときに、結論もないまま、原稿書いてしまって、それでも、“あるある、そういうことって”というような感想をいただいたおりには、もう、涙が出そうなくらい嬉しくって、救われた気分になったり…ということもありました。

顔を合わせられるメンバー以外の人々にも、実は、けっこう助けられているんだなあと、あらためて思ったんでした。



Information

●北海道国際女性フォーラム

「アジアの女性が語る未来 男女共同参画」に向かって

講演とパネルディスカッション コーディネーター お茶の水女子大学教授 原 ひろ子氏

・9月11日(金)13:00～ 京王プラザホテルにて

・主催・申込先は北海道環境生活部 231-4111(内線)24-565

どなたでも
参加できます。
入場無料

●どんなに障害が重くても地域の学校へ

小田嶋優子さんの普通学級就学を実現する会

・8月30日(日)13:30～

・札幌市社会福祉総合センター

※佐藤きみよさん、安岡南の進さんから問題提起をします!

●性教育学習会

「夏期セミナー報告」

-最近の性教育事情-

9月19日(土) PM 6:00

女性センター第3研修室

400円

*詳しくは性教協いしかりサークル細田(644-2927)まで

●性教育学習会

「障害者の性」

ビデオ視聴後話し合い

10月3日(土) PM 6:00

女性センターL・L研修室

400円

9月

差別?矛盾だけ!

女性と社会保障制度

-女性の年金等の矛盾について-



例会
案内

・お話

(社会保険労務士)

・日時

9月5日(土) PM 6:00～

・場所

女性センター第4和室

・問い合わせ

あごら札幌(細田 644-2927) ※カンパ
300円

日々のあごら例会!
是非
参加してね!

あ
と
か
き
涼

初めての入院。術後は麻酔のせいか、丸2日間吐き続けてもうさんざん!しかし以後は順調に回復。先日の検診で医者に「回復が早いね。体力があるんだ。もともと丈夫なんだねー」と言われてしまった!

思ったより順調だったので、自宅療養の後半はこんなにゆっくり過ごしたことないっていうくらい充分休養した。夏休みも入れると1ヶ月半。人生でこんなに長く休んだのは初めて!また忙しい仕事生活に順応できるかね。(E子)